

藝文

満洲総合文化雑誌

「幻」の全容が今明らかに―。
満洲における、初にして唯一の
日本語総合文化雑誌。
日中両国の第一線の研究者が集い、
その全貌を明らかにする。

満洲総合文化雑誌

藝文

世界史轉換の意義 宮川善道
大東亜に於ける新秩序の対立 マンチン
ハルビン

第二期建設と青年の志向を語る座談会
世界の文化と戦争を語る 中河與一
若原権

十月 號

ゆまに
書房 YUMANI
SHOBU

◆監修◆

呂元明

東北師範大学教授

鈴木貞美

国際日本文化研究センター教授

劉建輝

国際日本文化研究センター准教授

第I期
全22卷

文藝

について

本誌は、一九四二（昭和十七）年に創刊された、満洲における初にして唯一の日本語総合文化雑誌であり、「成熟」の時期に入った満洲文化を伝える貴重な雑誌資料である。

一九四三年十月までに計二十三冊（藝文社版）を刊行後、巻号数・発行所を改め一九四四年一月より一九四五年五月までに十六冊（満洲藝文聯盟版）が発行された。当時満洲の第一線で活躍していた知識人、文化人が執筆、行政の側から民間まで、およそ考えられるすべての方面の事項が扱われている。

文学を例にとつて言えば、それまで民族ごとに分かれ、様々なグループによる活動が行われていたが、政治的統制に要請された「文藝」という志のもとに、大同団結し、一つのまとまりを成しつつあった。文学だけでなく、すべての文化がそういった局面を迎えていたのである。「建国十年の節目」に「満洲文化」を統べるべく登場した「待望」の雑誌こそ、「藝文」であった。毎号見られる、各界の座談会も興味深い。第三号では「満洲」の原動力、満鉄のテクノクラートの思想がうかがえ、第四号には甘粕正彦も登場する。「大東亜戦争」期の「満洲」の人びとの思想と暮らしをリアルに伝える、充実した内容である。

日中両国で残存が少なく、長く「幻」とされてきたが、日中両国に散逸していた稀書を永年にわたって渉猟し、今回いよいよその全貌が明らかになる。今後、日本、中国近代文化史を語る上で、欠くことのできない資料となる。

●第一回配本・全六巻の主要目次

▼第1巻▲藝文 創刊号（第一巻第一号・昭和十七年一月）

総説 呂元明（東北師範大学） 解説 劉建輝（国際日本文化研究センター）

在満日本人青年の位置（星子敏雄）／各国の戦費調達方法と日満新租税政策の展開（東井金平）／開拓農場法の解義（小木貞一）／満洲文学界の展望と課題（山田清三郎）／「文化の反省序（吉野治夫）／放送藝術の問題（武本正義）／「自体翼賛運動の展開」社員会改組の理論的根拠（重任克己）／「自体翼賛運動の展開」国民組織と特殊会社の社員会（銚山亥三郎）／「自体翼賛運動の展開」満鉄青年自興運動の理念とその方向（古賀叶）／絵と文（險の村）／手の届く理論より（藤山一雄）／「随筆」馬（奥村義信）／「随筆」数学といふもの（高崎草朗）／日本作家の印象（上脇進訳、エヌ・ア・バイコフ）／民族の河（岡宮茂輔）／現地職場座談会（西安鉱業所の巻）／辻説法（丸山海介）／「短歌」技術を讀ふ（直木倫太郎）／満洲文学二十年（一）大内隆雄／体育奉公の実績（鈴木良徳）／川柳馬の世界（大島清明）／「詩」十年（坂井艶司）／「説物」不成の兄弟（高橋正信）／「俳句」凍江（高

▼第2巻▲藝文 臨時増刊号（第一巻第二号・昭和十七年一月）

解説 鈴木貞美（国際日本文化研究センター）

米英に対する宣戦の大詔／満洲国皇帝陛下詔書／満洲国政府声明／亜細亜復古の聖戦（好富正臣）／国民戦線の心構へ（福山寛邦）／大東亜戦争下の臨時議会／南洋の資源（多賀邦）／その日の新聞 満洲新聞 米英に宣戦布告 満洲日日 対英米宣戦布告 哈爾濱日日 天業恢弘の日来る 讀賣新聞 宣戦の大詔を拝す 東京日日 東亜開放戦の完遂へ 朝日新聞 帝国の対英宣戦／アンソロサクソン 東亜復讐罪悪史（鹿倉四郎）／比律賓独立運動の全

屋窓秋／「俳句」鷹（三木朱城）／文藝近事（坂井艶司）／映画近事（高尾憲太郎）／美術近事（今井一郎）／演劇近事（藤川研一）／音楽近事（村松道彌）／写真近事（佐藤甫）／日・英米戦要録／「創作」東北（北村謙次郎）／「創作」星雲（長谷川澄）／「創作」域性地帯（大内隆雄訳、山丁）／「創作」冬夜譚（日向伸夫）

貌（吉野一雄）／白熱化する国際電波戦（越野春夫）／戦争と文学（大内隆雄）／戦争と音楽（村松道彌）／澳門・広東・香港（樺本捨三）／「ニュース演藝」でかした長崎丸（伊藤樹志）／一機帰還せり（伊藤樹志）／香港開城秘聞（伊藤樹志）／満洲に於ける米の野心（岡録郎）／売られたシンガポール（足立光）／ハワイと日本人（土岐達）／輝く大東亜戦争日誌／輝く大東亜戦争果（二）／米海軍首脳者ノックス長官・スターク大将・キンメル提督・ハート大将・ニミット少将／太平洋とは何か／米海軍の現勢力／「時局漫画」そのうちスッカスカになる（坂本牙城）／因果応報（今井一郎）／神はニセ金を使ひ給ふ（坂本牙城）／米国の恐怖（坂本牙城）／三国同盟の威圧（坂本牙城）／東西味爽（坂井艶司）／祖国英米に宣戦す（金子麒麟草）／香港陥落（三浦余樹鳴）

藝文 第一巻第三号（昭和十七年二月号）

南方発展と北方問題（平貞蔵）／満洲の労務新体制（福田晴夫）／大東亜聖戦と満洲国金融（大沢菊太郎）／文学の性格（宮

井一郎) / 日本文学の撰り方(古丁) / 苦悶するソ聯邦(木島重治) / 満洲文学の二十年(二) 大内隆雄 / 満蒙民族音楽雑考(丸山和雄) / 新東亜文化の建設 大東亜戦争と文化共同体(杉村勇造)・戦争と美術(池辺青季)・文化と技術と素材(紫藤貞一郎) / 運動競技に現はれた米・比島人氣質(蘆田伸三) / 隨筆(桃太郎後日譚(進藤謙一)・匪賊に出逢ひそねた話(二階堂一)・大事事件の朝(玉利伸吾) / 旅にて(金子麒麟草) / 高山樗牛と評論活動について(仲賢礼) / 生活記 夏の或る朝(大河内恭子)・裏のきみちゃん(佐藤悦子)・福鉄号(長谷川精一)・防空壕(芳野春子)・となりの家(湯浅胤温)・フサ(山下洪子) / 青少年達の生活記(大村薫) / 現地職場座談会 戦争と大陸鉄道 / 癡者心理考(馬場鮎) / 第一回満洲帝国技能競争(津村新太郎) / 辻説法(丸山海介) / 短歌 さやけき朝(三井実雄) / 短歌 雪原(原三千代) / 放送近事(新見寛) / 演劇近事(藤川研一) / 美術近事(今井一郎) / 文藝近事(坂井艶司) / 音楽近事(村松道彌) / 写真近事(佐藤甫) / 米映画の東亜追放(荒木逸雄) / 創作 野狐(北尾陽三)・旅にし在れば(坂井艶司)・墟園(大内隆雄訳、呉瑛) ほか

▼第3巻 ▲藝文 第一巻 第四号 (昭和十七年三月号)

解説・単援朝 (崇城大学)

新世界史に於ける満洲建国の意義 / 大東亜戦争と満洲国の役割 (岡野鑑記) / 建国精神の発展(坂田修一) / 米英苦悶の正体とその救済(金崎賢) / 第一建国より第二建国へ(解半知) / 大東亜戦争と満洲経済(金久保雅) / 満洲原住民に就ての考察 / 満洲族とツングース族(大間知篤三)・満洲の弱小民族(山根順太郎)・蒙古民族の習俗(井手俊太郎)・満蒙の古代・民族と思想(保井克巳)・医学上より観たるオロチオン(山本昇) / 開拓十年史(前川義一) / 大陸科学十年(志方益三) / 建国外交史(大橋忠二) / 満蒙民族音楽雑考(丸山和夫) / 新興満洲文学論(建国精神より出発せよ(大内隆雄訳、爵青)・生活の実態を把握せよ(青木実) / 蘭印原住民の日本の伝統(扇沢千百治) / 満洲新聞界の今昔(上) 笠神志都延 / 満洲文学二十年(二) 大内隆雄 / 隨想 午歳所感(貞瀬謹吾) / 建国を語る(座談会) (出席者) 三宅光治・竹下中将・片倉大佐・甘粕正彦ほか / 鄭孝胥先生(建國人物素描) 佐藤瞻齊 / 辻説法(丸山海介) / 国土を讀ぶ眼 / 藤山二雄 / 兵隊の愛情(佐藤観次郎) / 満洲のメインテールを囲む人々(二) 雅本秀敏 / 俳句 建国十周年を寿ぐ(吉田

週歩) / 愛国詩輯(金音・外文・八木橋雄次郎・棚木一郎・島崎曙海・高木恭造・杉山眞澄・古屋重芳・川島豊敏・岩本修蔵・古川賢一郎) / 隨想 北人南物(大川進) / 建国十周年を迎へて(ハガキ回答) / 満洲に於ける農村演劇と演劇工作隊(森斌) / 文藝近事(坂井艶司) / 映画近事(高尾憲太郎) / 美術近事(池辺青季) / 演劇近事(藤川研一) / 放送近事(新見寛) / 写真近事(佐藤甫) / 戯曲 鶴越分隊(中村秀男) / 戯曲 タルチユフ役者(榎本捨三) ほか

▼第4巻 ▲藝文 第一巻 第五号 (昭和十七年四月号)

解説・西原和海 (文藝評論家)

戦時下のソ聯 ソ聯の内政と民情(江木卓雄)・戦時下のソ聯外交(山本愛三郎)・ソ聯の民族政策(本山頭一)・ソ聯戦時経済の諸問題(川西一夫)・独ソ戦争とソ聯財政(橋太郎)・戦時下のソ聯の農業問題(増山都夫)・戦時下の労働事情(倉知他人)・ソ聯の鉱工業(丸枝季繁)・戦時下のソ聯の交通(真鍋重忠)・戦時下のソ聯の対米貿易(辻橋康之)・ソ聯の増産文学(吉川文夫)・ソ聯の新聞と新聞指導(木島重治)・北氷洋に挑むソ聯邦(甲斐原文夫)・戦ふソ聯の女性(大越松夫)・ソ聯を動かす人々(安永治)・ソ聯の今昔(香川重信)・モスコを語る(大江晃) / 満洲文学の二十年(四) 大内隆雄 / 臨時全聯に就いて(加藤治雄) / 個人主義藝術概史(二) 林田茂雄 / 満洲の葉草(東丈夫) / 俳句 春色哈爾濱(佐々木有風) / 林房雄 / 古丁対談 / 大東亜戦争川柳日誌(一) 居平洞学人 / 満洲のメインテールを囲む人々(二) (雅本秀敏) / 辻説法(丸山海介) / 隨筆 桜花を彫つた碑(野嶋島人)・桜花の歌(瀬古確) / 列国の軍用機(国枝実) / 短歌 淤能基呂島(井幡やよひ) / 建国を語る(三) 月号所載 削除部分 補修 / 短歌 陣中詠(明石寺雪夫) 文藝近事(坂井艶司) / 映画近事(高尾憲太郎) / 美術近事(池辺青季) / 音楽近事(鳥羽亮吉) / 演劇近事(藤川研一) / 写真近事(佐藤甫) / 小説 女(牛島春子)・悪魔(大内隆雄訳、爵青) ほか

▼第5巻 ▲藝文 第一巻 第六号 (昭和十七年五月号)

解説・劉春英 (東北師範大学)

満洲国特殊会社機構整調の方向(村井藤十郎) / 道義国家建設と民族協和(大山彦二) / 蒙古を語る(金井章次) / 外族治下に於

ける支那宗教の史的素描(神尾式春) / 千振の農家経済(宗光彦) / 独ソ戦の推移と世界戦局(具島兼三郎) / 新聞新体制論(植村薫) / 在満日本人子弟の教育(風間久雄) / 満洲の「季」について(上) 金丸精哉 / 個人主義藝術概史(二) 林田茂雄 / 天佑と知性(小村俊夫) / 糸と文 雪の下に眠る(池辺青季) / 満洲文学の二十年(五) (大内隆雄) / 武藤富男論(風早義確) / 議會と満洲(吉田雅夫) / 満洲新聞界の今昔(二) 笠神志都延 / 隨筆 早春漫談(山崎元幹) / 川柳 軍神九勇士を讀ぶ(堀口塊人) / 「私の開拓地手記」に就て(上野市三郎) / 大東亜戦争と満洲電気事業(座談会) / 苦難を行く歡喜(文化時評) 桐天吉 / 泡鳴の臨終(榎本捨三) / 「阿片戦争」に寄せて(佐藤観次郎) / 北を護る兵隊(中川義勝) / 満洲のメインテールを囲む人々(三) 雅本秀敏 / 辻説法(丸山海介) / 満洲支那の看板に就て(堀越喜博) / 白系露人の生態(大谷勇夫) / 俳句 光緑明讀(野嶋島人) / 大東亜戦争川柳日誌(二) 居平洞学人 / 文藝近事(仲賢礼) / 映画近事(高尾憲太郎) / 放送近事(美濃谷善三郎) / 美術近事(池辺青季) / 演劇近事(藤川研一) / 写真近事(加持正範) / 小説 魔笛(壇一雄) / 復活(桐原信生) ほか

▼第6巻 ▲藝文 第一巻 第七号 (昭和十七年六月号)

解説・戦曉梅 (東京工業大学)

現代の国生み(森信三) / 思想戦主体としての協和会(田川博明) / 興亜の理念と儒教(高遵義) / 国民編成の問題(座談会) / 文藝時評 鼻を探す文学(遠田民夫) / 文化時評 歴史的観点の意義(桐天吉) / 謝恩特派大使に随行して(武藤富男) / 満洲の「季」について(下) (金丸精哉) / 航空の新展望(内海二郎) / ロシヤに於ける満洲研究(上) (坂口数雄) / 濠洲の文学と風土(北小路功光) / 開拓地の衛生対象(秋月正二) / 長白山の歴史(村山讓造) / 満洲のメインテールを囲む人々(四) (雅本秀敏) / 英靈に捧ぐ(大杉勝美) / 成吉思汗と義経入蒙伝説(山本守) / 満洲文学の二十年(六) (大内隆雄) / 印度洋海戦(梶原寅次郎) / 兵隊の持場(佐藤観次郎) / 東京の七日間(榎本捨三) / 辻説法(丸山海介) / 絵と文 前線の住民と住居(今井一郎) / 大東亜戦争川柳日誌(三) 居平洞学人 / 節米と糯米の食用に就て / 文学近事(仲賢礼) / 映画近事(高尾憲太郎) / 美術近事(池辺青季) / 演劇近事(藤川研一) / 音楽近事(鳥羽亮吉) / 写真近事(加持正範) / 大凌河(大内隆雄訳、戈禾) / 鶯(晶埜ふみ) ほか



本誌は、一九四二（昭和十七）年に創刊された、満洲における初にして唯一の日本語総合文化雑誌。「成熟」の時期に入った満洲文化を伝える貴重な雑誌資料である。

一九四三年十月までに二十三冊（藝文社版）。巻号数・発行所を改め一九四四年一月より一九四五年五月までに十六冊（満洲藝文聯盟版）が発行された。当時満洲において活動していた、知識人、文化人、行政の側から、民間に至るまで、およそ考えられるすべての方面での事項が扱われている。今回の配本で藝文社版は完結となる。

文学を例にとつて言えば、それまで民族ごと分かれ、様々なグループによる活動が行われていたが、政治的統制など個別の活動が困難になっていく状況の中、それらの作家達は、なかば要請された形だが、「文藝」という志のもとに、大同団結し、一つのまとまりを成しつつあった。文学だけでなく、すべての文化がそういった局面を迎えていたのである。そのような「建国十年の節目」と誰もが認識するなか、「満洲文化」を統べるべく登場した「待望」の雑誌こそが、「藝文」であった。

毎号見られる各界の座談会も興味深い、満鉄テクノクラートの思想がうかがえる「戦争と大陸鉄道」（第一巻第三号）をはじめとして、「建国を語る」（第一巻第四号、甘粕正彦が出席）、「満洲文化映画の方向」（第一巻第八号）、「ランプを囲む開拓村座談会」（第二巻第一号）など、様々な側面からの発言を見ることが出来る。また今回の配本には「小林秀雄氏を囲む」（第二巻第八号）といった貴重な座談会も含まれる。

日中両国で残存が少なく、長く「幻」とされてきたが今回の復刻によって、いよいよその全貌が明らかになる。今後、日本、中国近代文化史を語る上で、欠くことのできない資料となる。

●第1期 第三回配本・全10巻の主要目次

▼第13巻▲藝文 康徳十（昭和十八）年一月号

解説・劉建輝

〈第二巻 第一号〉

国民訓／経済建設の二つの面（橋樑）／生産拡充と技術（大河内正敏）／戦争とソヴェート映画（高田憲吉）／満洲の推進（満洲躍進と民族協和（中野清二）・第二次経済建設の諸問題（岩崎健事）・鉄の浪漫（藤山一雄）・満洲科学の推進（志方益三）／興亜青年力の結集（協和青年運動の特質と現況（永井正）・翼賛青年団の使命（宮内潔）・華北青少年運動の新発足（中務保二）／日本印象記（カカハ・アイケルト）／文化人の反省（佐藤観次郎）／〈文藝時評〉満洲文学への断想（大場剛）／七十年前の米英観（大森志朗）／〈新春随筆〉水平的民族協和論（岡野鑑記）・物憂き正月（大野斯文）・開拓迎春（向野元生）／辻説法（丸山海介）／書評（岸山三平）／〈絵と文〉新春風物詩（今井一郎・齋藤英一・河野宏・ルーファニン）／〈創作〉十年（大内隆雄訳、小松）／ほか

（榛葉英治）／満洲史学の一課題（西村一衛）／報徳道と村治派（高本広二）／北鉄回想（宮永次雄）／大陸秘譚（鶴大人功名嘯（東大作）／ロシア語二十五（平井肇）／西南国境を歩く（森斌）／チンギス汗（二）（丹羽新一郎訳、ヤンチエウヰッキイ）／汪主席遭難秘事（五百木元）／木崎龍の死（吉野治夫）／文学と耳（森下辰夫）／〈関東軍報道隊特輯〉報道隊員の手記（大野澤録郎）・〈絵と文〉航路標識（浅枝青甸）・〈絵と文〉凍てついた黒龍江（太田洋愛）・〈絵と文〉国境の兵舎（野田武男）・〈詩〉無題（逸見猶吉）・〈創作〉北辺抒情（筒井俊二）・〈創作〉海北（上野凌崎）／〈創作〉下士官室（八木橋雄次郎）／ほか

▼第17巻▲藝文 康徳十（昭和十八）年五月号

解説・鈴木貞美

〈第一巻 第五号〉

民族共和の具現（岡野鑑記）／興農増産（興農増産と興農政策（高倉正）・興農増産と興農合作社（細野重雄）・開拓増産の理論

（東大作）／辻説法（丸山海介）／書評（岸山三平）／農民文学について（上野市三郎）／〈創作〉江岸（北尾陽三）／偏西風（尾田幸美）／ほか

▼第20巻▲藝文 康徳十（昭和十八）年八月号

解説・鈴木貞美

〈第二巻 第八号〉

〈決戦特殊会社の進路〉現代国家体制に於ける特殊会社の制度的地位（村野藤十郎）・満洲特殊会社経営刷新の道（山本安次郎）／新生中華民国興隆の示唆（金崎賢）／勤労文化の昂揚と其の實踐（藤森章）／アジア映画の序章（北川鉄夫）／国民錬成と満洲体育（斎辰雄）／満洲と小村寿太郎（森一樹）／訛と民族（保井克巳）／日本海航路の特殊性と其の将来（伊奈隆二）／宗教と自然科学（マックス・ブランク 本多修郎・訳）／支那小説の「枕」（大内隆雄）／パンコック便り（越田清七）／詩人横沢宏への追憶（吉野治夫）／チンギス汗（六）（丹羽新一郎訳、ヤンチエウヰツ

▼第14卷 ▲藝文 康徳十(昭和十八)年二月号 第二卷第二号 解説・戦時梅

われら何をなすべきか／生活体系としての国民倫理(須郷侑太郎)／我国教育の構想と今後の問題(高山信司)／指導者論の日本の表現(中島駿吉)／基本国策大綱・対談(楠見義男・和田日出吉) 新民会と中国の進路(戸倉勝人)／縣政の一方(大貫大八)／満洲の記録庫(弥吉光長)／大陸美学(蒙古草原(山根順太郎)・樹海の藝術(成沢多美也)・河について(青木実)・山と人達(池辺青李)・衣服の美学(井辺一家)・建築・建設(郡菊夫)／瀋水鬼語(長谷川兼太郎)／満洲文学理論の方向(遠田民夫)／哈尔滨龍城(山田政吉)／白系露人点描(別役憲夫)／満洲密輸物語(志賀俊夫)／満洲演劇のために(島田敬二)／北辺羈旅小品(北村謙次郎)／辻説法(丸山海介)／書評(岸山三平)／創作) 先遣隊物語(菅忠行)／大陸秘譚(東大佐)／ほか

▼第15卷 ▲藝文 康徳十(昭和十八)年三月号 第二卷第三号 解説・劉建輝

増産とわれらの決意(国土計画) 大東亜国土計画と満洲国(沼田征矢雄)・開拓国土計画(五十子卷三)・交通と国土計画(佐瀬六郎)・科学国土計画(志方益三)／基本国策大綱と協和会(菅原達郎)／住宅問題と国民生活(岡崎寛之)／中国に於ける国民運動の展開 新国民運動と新中国の建設(楊光政)・新国民運動の指導原理(楊大荒)／勤勞奉仕制の厚生の察観(堀江宥之)／民族語彙考(保井克巳)／大陸秘譚(天鬼將軍(東大佐)／チンギス汗(二)丹羽新一郎訳、ヤンチエウエツキイ)／農産物交易風景(上野市三郎)／量子の世紀(本多修郎)／文藝時評 最近の満洲の作品(大内隆雄)／辻説法(丸山海介)／小説 醜御楯(工清定)・熔鋸炉(鈴木啓佐吉)／ほか

▼第16卷 ▲藝文 康徳十(昭和十八)年四月号 第二卷第四号 解説・単援朝

錬成の行／東洋的政治原理の確立(富永理)／満洲国基本国策大綱の展開(金崎賢)／決戦下の街村・座談会／英国的知性の没落

(天沢不二郎)・農地問題と内閣開拓民(江原又七郎)／満洲国思想戦・座談会／チンギス汗(三)ヤンチエウエツキイ作／丹羽新一郎訳)／協和運動の戦時的性格(松岡二十世)／教育の第二建設(佐藤達男)／ハリスの日本観(杉野炭子)／蒙古史料考(W・ハイシツヒ)／成吉思汗文獻雜記(丸茂武重)／生産文学よ興れ(山田清三郎)／大陸秘譚 雲水間諜市之信(東大佐)／鄭孝胥先生の風骨(佐藤胆齋)／辻説法(丸山海介)／開闢の大道を想ふ(牛島晴男)／夢の魅力(田所耕耘)／東洋美の凱歌(古長敏明)／創作 陥落の日(斎藤芳郎)／創作 復活祭のウエロチカ(松井武州)／ほか

▼第18卷 ▲藝文 康徳十(昭和十八)年六月号 第二卷第六号 解説・劉春英

思想戦原理としての大亜細亜主義(日高正夫)／日本主義の現代的再認識(丸木雀夫)／開拓村協同組織の性格(小西俊夫)／勤勞の日本の性格(中島駿吉)／基爾特・把頭・工会(小泉幸之輔)／自動車貫戦体制論(山田源次)／ソヴィエト生化学の課題(鈴木達雄)／実験農場の一夜(青木実)／榮興村の鮮農たち(今村栄治)／中国文藝復興の曙光(山田清三郎)／聊齋二題(五百木元)／復讐者喇嘛(牧岡健次)／チンギス汗(四)丹羽新一郎訳、ヤンチエウエツキイ)／第一回藝文社文学賞決定発表／逆現象の事ども(井上慶吉)／辻説法(丸山海介)／大陸秘譚 快馬張(東大佐)／文藝時評 新世代の倫理(徳田馨)／戯曲 奈落部隊(林田茂雄)／ほか

▼第19卷 ▲藝文 康徳十(昭和十八)年七月号 第二卷第七号 解説・西原和海

亜細亜解放の思想原理(天野寛)／指導者養成と学生勤勞奉公の理念(半田敏治)／国民勤勞奉公隊の実践体制(渡邊勳)／国家及び民族の将来と森林(有馬真肆郎)／決戦大陸生活論(岡崎寛之)／特輯 松花江 松花江史話(山本守)・北滿の母胎としての松花江(矢立鶴二)・魚皮を纏ひし人々(大間知篤三)・松花江の水域について(照井隆三郎)・松花江を語る 座談会・松花江の瀾橋(鍋島徳)／詩 河風(大野沢録郎)／チンギス汗(五)丹羽新一郎訳、ヤンチエウエツキイ)／大陸秘譚 快馬張 続

キイ)／夏空の星(神田清)／満洲街頭樹木学(竹内亮)／戦時食糧問題と満洲の食用植物(今井冷)／悲境熱河(石母田俊)／小林秀雄氏を囲む 座談会／創作 曙光(斎藤慎二)／噂の町(筒井俊二)／ほか

▼第21卷 ▲藝文 康徳十(昭和十八)年九月号 第二卷第九号 解説・岸陽子

青少年指導の根本原則(薄田司)／在満生活様式改変論(矢崎高儀)／満鉄素考(北條秀二)／藝文「改題について」／対支文化工作論(山口慎二)／南方紀行(馬場鯉)／伊藤公と満洲(藤山一雄)／チンギス汗(七)丹羽新一郎訳、ヤンチエウエツキイ)／成吉思汗寢園記(牧岡健次)／熱河の表情 熱河に於ける民族の問題(及川三男)・熱河青少年運動(高木昇三)・熱河と阿片(石原喜雄)・熱河考古瑣談(森常雄)・短歌 熱河青少年行動隊(石沢忍)／大陸秘譚 北海の快児(東大佐)／辻説法(丸山海介)／二宮尊徳肖像秘話(田島富徳)／決意の文学(筒井俊二)／クリークの源五郎(関屋牧)／創作 螢炎(仁木良介)／創作 初うぶ児(山田清三郎)／ほか

▼第22卷 ▲藝文 康徳十(昭和十八)年十月号 第二卷第十号 解説・西原和海

大東亜地政学と満洲の地位(宮川善造)／決戦教育の構想 在満日本人教育の諸問題(西元宗助)・開拓教育の構想と動向(五十子卷三)・教育者の立場から(高山信司)／興亜大会の思想性(天野寛)／満洲民族政策史(丸茂武重)／支那の村落生活(河上昇平訳、エ・ヤシノフ)／満洲と王永江(田島富徳)／南方紀行(二)馬場鯉)／大陸秘譚 蒙古の鈍・奇呆亭(東大佐)／チンギス汗(八)丹羽新一郎訳、ヤンチエウエツキイ)／書評(岸山三平)／豊公の大東亜政策(菅沼智)／辻説法(丸山海介)／「藝文」改題について／島崎藤村の文学 爵青／旅空で友人をおもふ(町原幸二)／満洲文学の背景(秋原勝二)／創作 部落の掟(浜崎初好)／ほか



藝文

第1期 全22巻

[監修] 呂元明 / 鈴木貞美 / 劉建輝

[解説]

呂元明 (東北師範大学)

戦暁梅 (東京工業大学)

鈴木貞美 (国際日本文化研究センター)

単援朝 (崇城大学)

劉建輝 (国際日本文化研究センター)

西原和海 (文芸評論家)

岸陽子 (早稲田大学名誉教授)

劉春英 (東北師範大学)

各巻の構成

第1期『藝文』〈藝文社版〉

全22巻揃定価285,600円(本体272,000円) ISBN978-4-8433-2910-8 C3393

【第1回配本】全6巻

揃定価84,000円(本体80,000円)

ISBN978-4-8433-2509-4 C3393

好評発売中

◆第1巻◆ 康德9(昭和17・1942)年1月号〈創刊号〉

・定価13,125円(本体12,500円) ISBN978-4-8433-2510-0

◆第2巻◆ 康德9(昭和17・1942)年1月臨時増刊号〈第1巻第2号〉 / 2月号〈第1巻第3号〉

・定価18,375円(本体17,500円) ISBN978-4-8433-2511-7

◆第3巻◆ 康德9(昭和17・1942)年3月号〈第1巻第4号〉

・定価14,175円(本体13,500円) ISBN978-4-8433-2512-4

◆第4巻◆ 康德9(昭和17・1942)年4月号〈第1巻第5号〉

・定価13,125円(本体12,500円) ISBN978-4-8433-2513-1

◆第5巻◆ 康德9(昭和17・1942)年5月号〈第1巻第6号〉

・定価13,125円(本体12,500円) ISBN978-4-8433-2514-8

◆第6巻◆ 康德9(昭和17・1942)年6月号〈第1巻第7号〉

・定価12,075円(本体11,500円) ISBN978-4-8433-2515-5

【第2回配本】全6巻

揃定価78,750円(本体75,000円)

ISBN978-4-8433-2796-8 C3393

好評発売中

◆第7巻◆ 康德9(昭和17・1942)年7月号〈第1巻第8号〉

・定価13,125円(本体12,500円) ISBN978-4-8433-2797-5

◆第8巻◆ 康德9(昭和17・1942)年8月号〈第1巻第9号〉

・定価13,125円(本体12,500円) ISBN978-4-8433-2798-2

◆第9巻◆ 康德9(昭和17・1942)年9月号〈第1巻第10号〉

・定価13,125円(本体12,500円) ISBN978-4-8433-2799-9

◆第10巻◆ 康德9(昭和17・1942)年10月号〈第1巻第11号〉

・定価13,125円(本体12,500円) ISBN978-4-8433-2800-2

◆第11巻◆ 康德9(昭和17・1942)年11月号〈第1巻第12号〉

・定価13,125円(本体12,500円) ISBN978-4-8433-2801-9

◆第12巻◆ 康德9(昭和17・1942)年12月号〈第1巻第13号〉

・定価13,125円(本体12,500円) ISBN978-4-8433-2802-6

【第3回配本】全10巻

揃定価122,850円(本体117,000円)

ISBN978-4-8433-2899-6 C3393

2008年6月刊行予定

◆第13巻◆ 康德10(昭和18・1943)年1月号〈第2巻第1号〉

・定価13,125円(本体12,500円) ISBN978-4-8433-2900-9

◆第14巻◆ 康德10(昭和18・1943)年2月号〈第2巻第2号〉

・定価13,125円(本体12,500円) ISBN978-4-8433-2901-6

◆第15巻◆ 康德10(昭和18・1943)年3月号〈第2巻第3号〉

・定価12,075円(本体11,500円) ISBN978-4-8433-2902-3

◆第16巻◆ 康德10(昭和18・1943)年4月号〈第2巻第4号〉

・定価12,075円(本体11,500円) ISBN978-4-8433-2903-0

◆第17巻◆ 康德10(昭和18・1943)年5月号〈第2巻第5号〉

・定価12,075円(本体11,500円) ISBN978-4-8433-2904-7

◆第18巻◆ 康德10(昭和18・1943)年6月号〈第2巻第6号〉

・定価12,075円(本体11,500円) ISBN978-4-8433-2905-4

◆第19巻◆ 康德10(昭和18・1943)年7月号〈第2巻第7号〉

・定価12,075円(本体11,500円) ISBN978-4-8433-2906-1

◆第20巻◆ 康德10(昭和18・1943)年8月号〈第2巻第8号〉

・定価12,075円(本体11,500円) ISBN978-4-8433-2907-8

◆第21巻◆ 康德10(昭和18・1943)年9月号〈第2巻第9号〉

・定価12,075円(本体11,500円) ISBN978-4-8433-2908-5

◆第22巻◆ 康德10(昭和18・1943)年10月号〈第2巻第10号〉

・定価12,075円(本体11,500円) ISBN978-4-8433-2909-2

第2期『藝文』〈満洲藝文聯盟版〉

全8巻(予定) 昭和19年1月号~昭和20年5月号(第1巻第1号~第2巻第5号)

続刊予定

関連企画

朝日新聞外地版

全65巻・別巻1 ●最多価格各36,750円(本体35,000円)

[監修] 坂本悠一 昭和10年12月1日から同20年までの外地の地方版(朝日新聞西部本社所蔵)を集成。対象地域は朝鮮、台湾、満洲、中国であり、1930年代半ばから敗戦までの10年間に、日本の新聞が地方版という形で東アジア各地の動向をどう報道したか、あるいは各地の統治政策とどう関係していったか、など興味深い問題が提示されている。



〒101-0047
東京都千代田区内神田2-7-6
TEL.03(5296)0491
FAX.03(5296)0493
http://www.yumani.co.jp/
e-mail eigyou@yumani.co.jp

●特におすすめしたい方● 近代日本文学、中国文学、近代日本史・アジア史研究者、関係研究機関、大学図書館・公共図書館など。

ゆまに書房 Tel.03(5296)0491/Fax.03(5296)0493 年 月 日

※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。

ご注文書

藝文 第1期・全22巻

第1回配本(全6巻) 第2回配本(全6巻) 第3回配本(全10巻)

セット

取扱店

お名前
ご住所

TEL ()



08.05/01.7000.H